九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

杜甫詩文集の形成に関する文献学的研究

長谷部，剛

https://hdl.handle.net/2324/2534519

出版情報：Kyushu University, 2019, 博士（文学）, 論文博士
バージョン：
権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

（様式３）

氏　　名　：長谷部　剛

論 文 名　：　杜甫詩文集の形成に関する文献学的研究

区　　分　：乙

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は第一部の「本論」と第二部の「各論」からなる。

第一部「本論」の「唐代における杜甫詩集の修正と流伝」「『宋本杜工部集』・『文苑英華』所収杜甫詩文の異同について」「『文苑英華』からみた唐代における杜甫詩集の集成と流伝」の三章においては、「中唐期にすでに杜甫詩文集の定本が存在し広く流通していたとは考えにくい」と述べ、さらに論を進めて、宋代の王洙本『杜工部集』と、幾つかの事例では明らかに唐鈔本の原貌を留めていると考えられる『文苑英華』とが大きく異なる以上、中唐期から『文苑英華』までのあいだに、王洙本『杜工部集』と変わらない完全さを備えた杜甫詩文集のテキストが編集されていたと想定することも難しくなると推測した。これらの研究成果に基づき、先行研究がその存在を推測する「北宋の王洙が編集する以前、すでにその(引用者注、杜甫の)全生涯の作品を網羅した」杜甫の詩文集は、仮に存在していたとしても、古体詩三九十首、近体詩一千六首を納める王洙本『杜工部集』のごとき全きものではなかったと判断した。杜甫が没した直後に編集され二百九十篇の杜詩を収める樊晃『杜工部集小集』は杜甫の全生涯の作品を網羅してはいるが、安史の乱勃発後から四川に流寓した時期にかけての作品が多く、それに次いで最晩年の湖南漂泊期の作品が多く収められる一方、安史の乱以前の作品と夔州時代の作品が極端に少ないなど、収録される杜詩は制作時期によって偏在している。『文苑英華』所収の杜詩もそれに似た傾向を示している。『文苑英華』もまた『杜工部集小集』『唐詩類選』と同じく、部分的に収集されて成立した、おのおの独立した複数の杜甫詩文集を参照していた可能性を指摘した。

続いて「宋代における杜甫詩集の集成と流伝」では、五代・北宋期に王洙本『杜工部集』が編集されるまでのさまざまな杜甫詩文集について整理・概観し、「本論」の終章たる「『宋本杜工部集』の成立」では『宋本杜工部集』の持つ諸問題について検討した。『宋本杜工部集』とは、上海図書館蔵の杜甫詩文集が 1957 年に影印本として出版されたもので、現在、杜甫詩文集の定本としての地位を獲得している。この論文では『宋本杜工部集』について先行研究によりつつ、このテキストの持つ特徴――北宋の王洙が編集し南宋の王琪が刊刻した第一本と、南宋の呉若が刊刻した第二本の、二種類のテキストを合併している――を具体的に紹介し、さらに第二本の「呉若本」の持つ問題を検討した。清の銭謙益『杜工部集箋注』は、南宋の「呉若本」を底本としたことを宣言しているが、「呉若本」は現在伝えられず、このために後年、「呉若本」は銭謙益の偽作であるとの説が提出された。しかし、1957 年に『宋本杜工部集』が刊行され、この書（の第二本）の校語や注語が『銭注杜詩』のそれとほぼ一致することから、「呉若本」の実在が判明し、それにともなって『銭注杜詩』

の文献的価値も高まった。今回、筆者は、「呉若本」の注語を銭謙益がどのように処理したか、という点に注目した。そして明らかになったのは、杜甫の自注と他者の注語を分別するという銭謙益の行為が、結果的に、杜集編纂史における「呉若本」の過渡性を表しているという事実であった。

以上の「本論」所収の五章の考察によって、唐代から宋代にかけての（具体的には『宋本杜工部集』が成立するまでの）杜甫詩文集の筆写・流伝・編集・刊行の実相が明らかになった。

第二部「各論」は三章で構成される。第一章「杜甫「兵車行」と古楽府」は、杜甫の楽府「兵車行」に附せられた題注をてがかりにして、「木蘭詩」、魏晋南北朝の楽府、そして「兵車行」の創作意図を論じたものである。『宋本杜工部集』では、この詩の題下に「古楽府云」として詩の一説が引用されているが、従来の研究者にはこれが「木蘭詩」であるとされてきた。しかし本論文では、「木蘭詩」の成立過程の分析を通して旧説を否定する。「木蘭詩」が複数の箇所で、「折揚柳枝歌」など既存の楽府歌辞を取り込んでいることに着目する一方、「兵車行」には『詩経』や漢代楽府のみならず、「紫騮馬歌辞」「企喩歌」など「梁鼓角横吹曲」に属する歌をふまえた表現があることを指摘した。さらに、それらは「梁鼓角横吹曲」に取り入れられる以前の、後漢末から西晋にかけての相続く戦乱を背景として作られた歌辞ではないか、と推定し、『宋本杜工部集』の「古楽府」との関連性を指摘した。最後には、『宋本杜工部集』の「古楽府」の存在から、杜甫「兵車行」の創作意図を分析した。詩中の「耶娘」という白話的色彩の濃厚な語が、古楽府に典拠をもつことを杜甫自らが示すことによって、出征兵士の労苦をうたった諷喩詩「兵車行」を制作することで、仕官の手がかりとしようとする意図があったと結論づけた。

第二章「杜甫「逢李亀年」の唐代における流伝について」もまた『宋本杜工部集』に見られる杜甫自注の存在に注目することで、杜甫の詩のなかでも伝奇性に富む「江南逢李亀年」詩の唐代における筆写・流伝の実態を明らかにした。

第三章「『諸名家評本銭牧斎註杜詩』所載李因篤音注について」は、清末に刊行された『銭注杜詩』系テキストの一つに見られる、清・李因篤の注釈をあらためて検討することにより、そのなかの音注に顧炎武の中古音研究と大いに関わる部分があることを発見した。

以上の考察を通じて、中国古典のなかで「詩聖」として崇められる杜甫の作品とその詩文集の成立過程をより具体的に明らかにしたのがこの学位請求論文である。